

# 栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題について<sup>†</sup>

## —ダンス必修化に関するアンケート調査から—

茅野 理子\*  
宇都宮大学教育学部\*

### 概要

本報告では、中学校ダンス必修化が平成24年度から完全実施されるに当たり、栃木県の公立中学校におけるダンス授業の実態を明らかにするとともに、必修化に関わる問題点を整理することを目的とした。また県立高等学校における授業の実態と比較することにより、中学校必修化の問題点を抽出するとともに、中高連携の課題について提言することを意図した。その結果、中学校において指導要領に沿った実施がなされているが、現場の教員にとって、経験のなさなどから、教材研究などの面で戸惑いがあり、また、ダンス指導上の参考として、映像資料や講習会での実践が求められていることが明らかになった。

キーワード：ダンス必修化、創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンス、学習内容

### 1. はじめに

文部科学省では、平成20年3月28日に中学校学習指導要領の改訂を告示し、新学習指導要領では中学校保健体育において、武道・ダンスを含めたすべての領域を必修とすることとした。

文科省のホームページ<sup>※1)</sup>では、中学校において武道・ダンスを必修化する理由について、以下のように説明している。

生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する視点から、多くの領域の学習を十分に体験させた上で、それらをもとに自らが更に探求したい運動を選択できるようにすることが重要で、このため、中学校1年・2年でこれまで選択必修であった武道とダンスを含めたすべての領域を必修とし、3年から領域選択を開始することとする。

その上で、ダンスの運動特性について、次のように解説している。

ダンスは、「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」で構成され、イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重

視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。

この運動特性は、運動が人間のどのような欲求を充足するか、または、身体的な必要性を充足するのに着目した機能的特性からくるものであり、それによると、運動は、欲求の充足を求める運動と必要の充足としての運動に大きく分類され、前者には、挑戦の欲求を求める運動であるスポーツと模倣・表現の欲求に基づく運動であるダンスが含まれる。また、後者に含まれるのは、体操（現、体づくり運動の体力を高める運動）である<sup>※2)</sup>。

つまり、「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する視点から、多くの領域の学習を十分に体験」させる上で、この3分類は前提として押さえておくべきことであり、ダンスは、「表現」に運動特性が置かれることを重視しておかなければならない。

因みに、武道は、この分類ではスポーツに含まれるが、「我が国固有の文化」という点で特徴づけられている。

さて、ダンス指導実践に関する先行研究では、平成3・4・5年度全国舞踊研究会プロジェクト研究による小中高教員を対象とした全国調査<sup>※3)</sup>がある。

<sup>†</sup> Masako CHINO\* : Current Situation and Tasks of Dance Guidance in Physical Education Curriculum in Utsunomiya Prefecture.

\* Faculty of Education, Utsunomiya University

これは、「大学専門教育改善のための現職教員のダンス指導実践に関する調査研究」であるが、指導実践に関わる内容として、以下のことを結論としている。

・教育現場における指導経験は指導観を育て、指導実践への原動力になる。教員になってからの「指導の場」の重要性が認められる。

・大学時ならびに講習会の内容は、「指導法」への着目が必要である。また、実技能力については「つくる」についての力が必要である。それらが役に立つ内容として、自信を持てる内容として育つために、機会の拡大と内容方法の充実について、さらに検討し進める必要がある。

・卒後の研修機会は十分とは言い難い。機会や参加者の拡大と内容の検討が求められている。講習会においても、指導法や「つくる」力を育て、有効な指導実践を支えるものとする努力が必要である。

・男女の履修経験の違い、指導実践の違いが明らかであるが、実践の拡大充実を進める一つとして、男性教員に対する履修経験の拡大を図り、指導の担い手としての力量と自覚を図ることが必要である。

一方、必修化に伴い、近年様々な調査が県単位でも報告されているが、それに関わる主要な先行研究の一つとして、村田<sup>註4)</sup>は以下の指摘をしている。

・ダンスの必修化を実現させるためには、必修化の意味や取り上げる内容の特性について、教員の理解と意識が必要である。

・踊るという行為を通して、「コミュニケーション能力」が得られると考えている教員が多く、必修化になることで特にこの点に期待が寄せられている。

・ダンスの必修化に対する教員の意識は、これまで指導経験のない教員も指導にあたるなど、「生徒には良いことだが、教員には負担」という考えが大半を占めており、教員の確かな指導力を獲得するためにも、誰でも気軽に参加してダンスの楽しさを研修できる機会を望んでいることが明らかとなった。

また、中村(2009, 2010)は、必修化に伴うダンス授業の変容と展望として、採択ダンス種目は、現代的なリズムのダンスが最も多いが、既成の動きの習得学習を中心に実施している学校も少なくなく、学習の質が十分確保されているとはいえないこと、多くの教員がダンス指導法や指導力養成の必要性を感じていたが、教員のダンス指導研修・教材研究はあまり進んでいないことを指摘している。

このような先行研究を踏まえ、また、比較検討しながら、本研究では、栃木県全公立中学校におけるダンス授業の実態と課題を明らかにすることを目的とした。また、県立高等学校における授業の実態と比較することを通して、中学校必修化の問題点を鮮明にするとともに、中高連携の課題について提言することを研究目的とした<sup>註5)</sup>。

## 2. 研究方法

郵送法による質問紙調査に拠った。

調査は、学校長と体育主任宛に依頼状を送付し、体育主任またはダンス担当教員に回答を求めた。

なお、調査に当たっては、回答者のプライバシーの保護に配慮し、結果は統計的に処理すること、調査以外の目的で使用しないこと、答えにくい質問には無記入でよいことを明記するとともに、調査への協力は任意であり、質問紙の提出をもって同意が得られたものとするとの断り書きをした。

①調査期日：平成24年8月～9月

②調査対象：栃木県公立中学校161校・県立高等学校47校（男子校を除く）

③調査内容：対象者属性・ダンスに関する年間指導計画・ダンス及びダンス必修化についての考え

④回収率：中学校63%（102校）高校70%（33校）

## 3. 結果及び考察

### (1) 対象者の属性

回答者の性別は、中学校では男性57名、女性45名であり、高校では男性9名、女性24名であった。中学校で男性回答者が多い要因には、女性教員が少ないという教員構成を反映していることが考えられる。専門としていた種目では中高ともに球技が最も多く、55%と42%であった。ダンスを専門としていたのは、中学校では1名であり、高校では5名であった。中学校でダンス経験がない教員は、27名であり、すべて男性である。

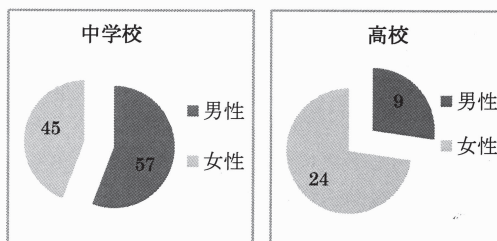


図1. 回答者の性別

(2) 今年実施するダンスの種類と生徒にさせたい種類

今年度ダンス授業を行うかどうかについては、中学校では、非該当1校を除き、すべての学校で行うとの回答を得た。これに比して、高校では、行う28校、行わない4校、非該当1校であった。このうち、中学校で2年生まで男女必修でダンス領域を配分（1年次のみ、2年次の場合と配当時間数及び担当教員の性別に回答のないものを除く）しているのは、80校（78%）であった。また、配当時間数は、4時間から21時間まで学校によって幅が大きい。2年次男女必修で最も多かった配当時間数は、10時間（24校）であった。

ダンスを担当している教員の性別は、中学校では男女どちらも担当するのは41校、男性教員32校、女性教員24校、無記入4校であった。高校では、男女どちらも担当するのは9校であり、後は女性教員19校であった。中学校で男性教員の担当が多いのは、先に述べたように教員構成に因るものであると推測されるが、担当する男性教員のうち約3割（21名）はダンス経験がないと回答しているのは課題である。

中学校で実施するダンスの種類（図2）では、3つの内容をすべて行う学校が最も多く、新学習指導要領にそった内容構成であることが認められる。しかし、生徒にさせたいダンスの種類（図3）では、現代的なリズムのダンスが最も多い。ストリートダンスの流行を反映した結果であるが、そのために現場の教員が技能の習得に苦勞しているという状況も報告されている（資料1参照）。また、前述したように、既成の動きの習得学習を中心に実施している学校も少なくないこと、資料1にみられるように、ビデオによる自習的な学習になりがちであることなどの問題点も指摘されている。

何を、どのように教えるのか、「授業づくり」の問題は、今後の重要な課題である。

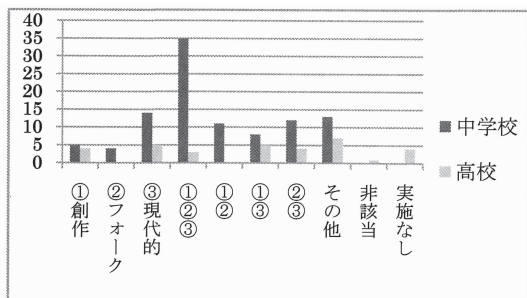


図2. 今年度実施するダンスの種類 (校)

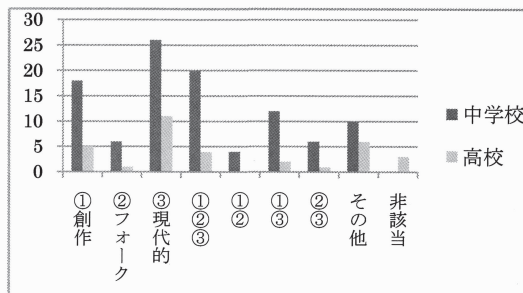


図3. 生徒にさせたいダンスの種類 (人)

(3) ダンス指導についての意識

ダンスの指導が好きかどうかについて尋ねたところ（図4）、中学校では「嫌い」「どちらかという」と嫌いをあわせて57%であり、半数を超える。高校では61%で、中学よりも若干多い。性別でみると、中学校では、「好き」と回答しているのは女性教員のみであり、逆に「嫌い」は男性教員のみである。「どちらかという」と嫌いは女性教員18名に対し、男性教員34名と約2倍になっている。回答者自体の比率を考えると、男性の方が多いと言える。一方、高校では、「好き」については女性教員のみで同様であるが、「嫌い」にも女性教員の回答が見られる。また、必修化に対する高校教員の自由記述の中にも、「女子教員のみ負担がかりすぎる。（略）ダンスは女子の教員が指導するものと考えている人が多いのでやりづらい」という意見がある。

20年前の全国調査で「実践の拡大充実を進める一つとして、男性教員に対する履修経験の拡大を図り、指導の担い手としての力量と自覚を図ることが必要」と提言されていることは既に述べたが、高校では未だに女性教員に依存している実態があり、また、中学校では現実には男性教員が担当する学校が増えており、男性教員（同時に苦手とする女性教員）が、活きるダンス教材の開発は今後の重要な課題である。

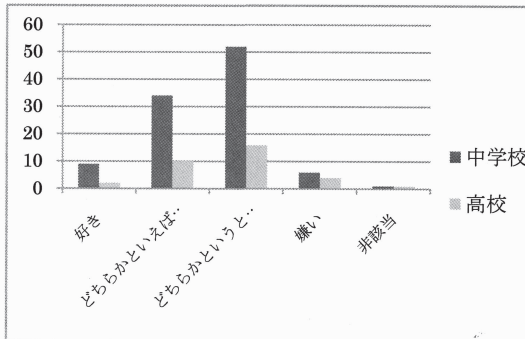


図4. ダンスの指導は好きですか (人)

(4) 体育の中におけるダンスの重視度

ダンスを体育の中で重視しているかについては、図4に示されるように、中学、高校ともに「他領域と変わらない」とする意見が最も多かった。

「重視していない」と回答した理由に着目してみると、中学校では、「自分に体験がない」が5名で最も多く、続いて、「体力づくりにならない」2名、「他領域に比べ価値がない」1名、「その他（必修化する必要があったのかまだ疑問に思っている）」1名となっている。一方、高校では「自分に体験がない」「体力づくりにならない」がともに1名である。

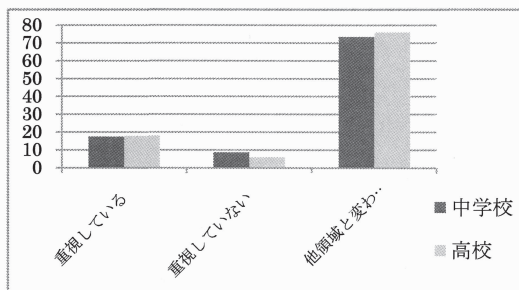


図4. ダンスを体育の中で重視しているか (%)  
(5) ダンスの教材研究・指導法研修の有無

教材研究・指導法研修の有無について尋ねると(図5)、中学校では「しているが不十分」が最も多く、34%であった。高校で「とくに何もしない」が最も多い24%であることを考えると、必修化の影響をみることができるように思われる。

しかし、中村が指摘しているように、「多くの教員がダンス指導法や指導力養成の必要性を感じていたが、教員のダンス指導研修・教材研究はあまり進んでいない」のも事実である。また、研修内容についても20年前から示唆されている、有効な指導実践を支えるものとなっているかどうかは、これまでみてきた実態を考えると、未解決の部分が多いように思われる。

表2. 指導の際に障害になること(創作ダンス, フォークダンス, 現代的なリズムのダンス)

	内容	1位	2位	3位
中学校	創作	生徒が動かない	自分で動いてみせられない	生徒の能力に差がある
	フォーク	生徒が動かない	踊り方がわからない	評価の仕方 男女教員構成
	現代的な	自分で動いてみせられない	生徒の能力に差がある	生徒が動かない
高等学校	創作	生徒が動かない	自分で動いてみせられない	評価の仕方
	フォーク	生徒が動かない よい指導資料がない	自分で動いてみせられない	
	現代的な	自分で動いてみせられない	生徒の能力に差がある	生徒が動かない 指導内容がわからない

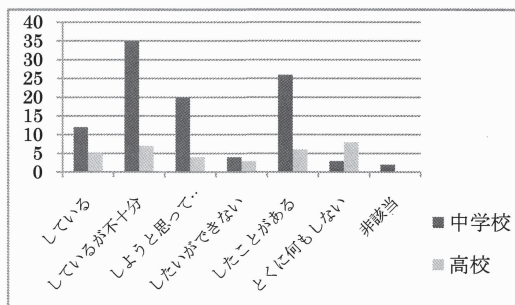


図5. ダンスの教材研究・指導法研修の有無 (人)  
表1. ダンスを指導する上で一番参考になるもの  
(上位3位, 非該当を除く)

中学校	1位	講習会での実践	(35%)
		ビデオ等の映像資料	(34%)
	3位	身近にいる先輩同僚友人等の指導	(10%)
高等学校	1位	講習会での実践	(37%)
	2位	ビデオ等の映像資料	(33%)
	3位	レッスン所での体験・大学時履修経験・身近にいる先輩同僚等...	(7%)

指導上一番参考になるものについて、23名が複数回答した。換言すれば、それだけ求められているものが多いと言えるが、表1は、これらを非該当として除いた結果である。講習会での実践とビデオ等の映像資料を多くの教員が挙げており、今後、授業実践を通して、普遍性のある教材開発を図ることの必要性がここからも窺える。また、第3位に中学校、高校ともに「身近にいる先輩同僚友人等の指導」を挙げており、すでに指摘されていた「教育現場における指導経験は指導観を育て、指導実践への原動力になる。教員になってからの『指導の場』の重要性が認められる。」ということを実証する結果となった。なお、非該当を加えても順位は同様であった。



### (6) 指導の際の障害

指導の際に障害になること(表2)については、中学、高校ともに、ダンスの種類を問わず、「生徒が動かない」「自分で動いてみせられない」に集中している。このような問題は長く指摘されていることでありながら、未だに解決されていない問題であり、教員の指導力を高めることと明確で普遍的な学習内容(指導内容)の提示は、必修化に伴って、喫緊の重要課題となっている。

### (7) ダンスの教育的意義

ダンスの価値(表3)をどのようにみているかについては、中学校、高校ともに第1位に「仲間との共感の時間がもてる」ことを挙げている。「表現・伝達の喜び」、「心身の開放」、そして「感情を豊かにする」を含めて、スポーツや体操では得られないダンス独自の意義を授業の中でどのように展開していくか—そのことが、必修化にいたる理由として、文科省が示している「生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する視点から、多くの領域の学習を十分に体験させた上で、それらをもとに自らが更に探求したい運動を選択できるようにすることが重要」ということにつながっていくのではないだろうか。

表3. ダンスの価値(上位3位)

中学校	1位	仲間との共感の時間がもてる
	2位	表現・伝達の喜びを体験できる
	3位	感情を豊かにする
高等学校	1位	仲間との共感の時間がもてる
	2位	心身の開放ができる
	3位	感情を豊かにする

### (8) ダンス必修化に対する考え

ダンス必修化に対しては、中学校では「非常に良い」「まあ良い」をあわせて62%であった。高校では52%が賛同している。

村田が、「指導経験のない教員も指導にあたるなど、『生徒には良いことだが、教員には負担』という考えが大半を占めており」と指摘しているが、本調査においても、「必修化自体はすばらしいが教師の方がスキルや知識不足。特に男性」という意見がみられ、現場での苦心が窺われた。村田が続けて、「教員の確かな指導力を獲得するためにも、誰でも気軽に参加してダンスの楽しさを研修できる機会を望んでいることが明らかになった。」と示唆してい

るように、今後そのような機会を多くつくっていくことが課題である。

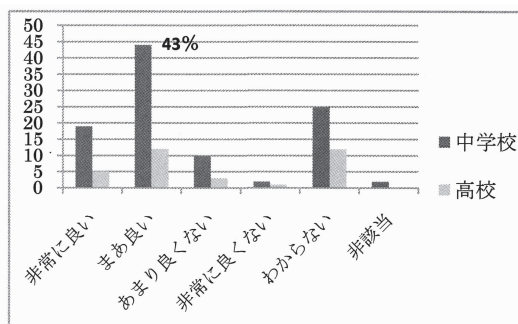


図6. 中学校ダンス必修化に対する考え(人)

### (9) ダンス指導の好嫌に関わる要因

最後にダンス指導の好嫌について、その要因を探ってみたい。

中学校において明らかに言えることは、「指導が嫌い」と回答した6名のうち、5名までがダンス経験のない男性教員であった。「指導が好き」「どちらかといえば好き」をあわせて、最も多かったダンス経験が、「大学時ダンス授業履修経験1年以上」(18名)であり、次いで「半年以内」(14名)であった。逆に、「どちらかという嫌い」は、履修経験1年以上が12名であるのに対し、半年未満は26名であった。20年前の全国調査では、この二つに有意な差がみられたが、本調査でも同様のことが言えそうであり、大学時のダンス授業の重要性が示唆された。

## 4. 結論

本調査から得られた知見は以下の通りである。

- ・栃木県の中学校において、概ね指導要領に沿った実施がなされていることが認められた。
  - ・中学校においてダンスを担当するのは男性教員が多い傾向にあり、その約3割はダンス経験がない。一方、高校においてはほとんどが女性教員の担当である。
  - ・体育の中でダンスは他領域と変わらず重視されているものの、その指導の好嫌については、中高ともに否定的意見の方が多い。
  - ・現場の教員にとって指導法や教材研究などの面で戸惑いがあり、また、ダンス指導上の参考として、映像資料や講習会での実践が求められている。
- 今後、明確で普遍的なダンス教材の開発とその実践による検証をさらに進めていきたい。

## 註釈

1) 文部科学省ホームページ, 「学校体育の充実; 武道・ダンス必修化」参照。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/jyujitsu](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu)

なお、ホームページには、指導資料集として、新学習指導要領に基づく中学校向け「ダンス」リーフレットも掲載されている。

2) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著 (2002) 体育科教育学入門. 大修館書店. pp. 52-53

運動特性は、L. カイヨワのプレイにむかわせる4つの心理的態度を基にしている。彼は、『遊びと人間』の中で、プレイを「面白さや楽しさあるいは喜び」を求める活動と定義し、それにむかわせる4つの心理的態度として、Agôn (自己の優越性を示すために、独自の意志と実力によってなされる活動: 競争), Alea (何の努力もせずに幸運をつかもうとするもの: 偶然, 運), Mimicry (人が他者, または他の何物かをなぞらえること: 模倣, 擬態), Ilinx (一時的に知覚の安定を破壊し、意識を官能的な目眩の状態に落とし入れること: 渦巻) に分類している。この論を基に、ダンスの運動特性は模倣, 表現として説明されるが、ダンスには、回転舞踊などのように Ilinx の要素も併せ持つという考えもある。

3) 日本教育大学協会保健体育・保健研究部門全国舞踊研究会 (1994) 大学専門教育改善のための現職教員のダンス指導実践に関する調査研究. 平成3・4・5年度全国舞踊研究会プロジェクト研究報告書. pp. 9-10

なお、本報告は、学校種別や地域別検討により、いくつかの研究として発表したものを報告書としてまとめたものである。以下に代表的な発表論文を示す。

松本富子・高橋和子他 (1994) 現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討—大学時履修経験が与える影響について—. 舞踊学 16: 12-23.

4) 引用は、村田芳子 (2010) 表現運動・ダンスにおける学習内容の選定と妥当性の検証. 科学研究費補助金研究 (2007~2009) 成果報告書に拠る。

5) 本調査は、平成24年度宇都宮大学地域連携活動事業の一環として行ったものであり、調査に当たっては、以下のワーキンググループを組織し、調査内容等の検討を行った。所属は平成24年当時。

小学校: 小島治代 (宇都宮市立瑞穂野南小学校)

塚原美唱 (宇都宮市立瑞穂台小学校)

中学校: 磯川治美 (宇都宮市立泉が丘中学校)

宇賀神恵理 (宇都宮市立鬼怒中学校)

大森淳子 (宇都宮大学教育学部附属中学校)

高校: 斎藤浩子 (栃木県立宇都宮商業高等学校)

高野あけみ (栃木県立富屋特別支援学校)

山崎早苗 (栃木県立石橋高等学校)

## 謝辞

ご多忙の中、調査にご協力いただきました関係各位に感謝申し上げます。

## 主要参考文献

・中村恭子 (2009) 中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容—平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から—. Research Journal of JAPEW 26:1-16.

・中村恭子 (2009) 中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて—. 順天堂スポーツ健康科学研究1 (1) (通巻13): 27-39.

・中村恭子 (2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望—東京都立中学校を対象とした調査から—. 順天堂スポーツ健康科学研究1 (4) (通巻16): 472-485.

・ロジェ・カイヨワ 多田道太郎・塚崎幹夫訳 (1973) 遊びと人間. 講談社.

#### 資料 1. ダンス必修化についての報道記事例（内容抜粋）

##### ●ヒップホップに先生奮闘 中学でダンス必修化 新潟 教育：朝日新聞デジタル 2012年3月29日取得

「生徒の方が上手かも」－そうした戸惑いを解消するため、新潟県のある中学校では、近くのダンススタジオに協力してもらい、特別授業をすることにした。県教委も今年の夏と秋に予定している体育教諭の研修で、プロによるヒップホップダンスの講習の時間をとる。ダンススタジオにとって、この動きは大きい。ヒップホップは、ダボダボのファッションや、路上で練習する若者のイメージから、悪印象を持つ人もいる。はやり左右されやすく、地域によって認知度の差も激しい。「必修化はダンスを志す人の地位向上につながるのではないかと期待する。ただ、公立中学校では、外部講師に払う予算がないことが多く、費用を捻出することができずに講師を招くのをあきらめたり、ボランティアで授業をお願いしたりすることもあるようだ。「スタジオを経営しながら無償で続けることは難しいので、学校や全国のダンススタジオ組織とも連携してシステムをつくりたい。」（高岡佐也子）

<http://www.asahi.com/edu/news/TKY201203280630.html>

##### ●中学校の先生、ダンスに奮闘中 授業必修化で教室通いも

社会：朝日新聞デジタル 2012年5月17日取得

全国の6割超の学校がヒップホップなど現代ダンスを選択し、戸惑っている教員も少なくない。その不安を解消しようと、民間のダンス教室や自治体の講習などが盛んになっている。「ヒップホップなんてやったことがない。技術を高めない授業にならない」「生徒の中には、スクールに通う子が多く、指導に自信がない」－日本ストリートダンス協会（東京都港区）が主催した教員向けの無料ダンス講習会。約50人が参加していた。東京都の区立中学教諭は、ダンス教室に通う生徒が1クラスに3、4人いて「私よりうまい」。別の中学の女性教諭は、やはり上手な生徒にお手本役を任せてしのいだという。

<http://www.asahi.com/national/update/0517/TKY201205170115.html>

##### ●ダンス中学必修化で教諭「つらい」 指導法を模索、独学で勉強も

福井のニュース 社会：福井新聞デジタル 2012年6月12日取得

福井県内では、「現代的なリズムのダンス」を選択した学校が半数を超える。「子どもたちが親しみやすいヒップホップを通して、ダンスを好きになってもらいたい」との思いからだが、一方で「イマドキ」のリズムの動きに戸惑う体育教諭は少なくない。DVD や市販の参考書で独学するなど、指導法の模索が続いている。必修化を前に県教委は2010、11年度に計20回の講習会を開いた。10年度に3回受講した教諭は「基本的な動きのパターンを覚えるだけでも大変だった」と振り返る。ダンスの授業は年間10～12コマ、開始時期は各学校に任されている。県スポーツ保健課によると、県内76中学校の1年生で「現代的なリズムのダンス」を選択するのは55校に上る。「年齢を問わず、教え方に戸惑っている体育教諭は多い。」頭ではステップを理解していても、慣れない動きに体がついていかないのだという。「ヒップホップのDVDを見ても『自分にはできない』と落ち込む。でもダンスは楽しむもの。試行錯誤しながら、まずは私自身がテンションを上げて生徒に教えています」と苦笑い。ある校長は「正確なステップは大事。でも、それ以上に体を動かす楽しさや、仲間とのつながりを教えていくことが重要」とダンス授業の意義を話す。公開授業の1コマ体育館には各ステップの模範例を映し出すパソコン約10台を配置。生徒各自が、苦手なステップのパソコンの前で約10分間練習、見よう見まねでステップを習得していた。生徒は「難しいけど、苦手なステップを集中して練習できる。おもしろい」と授業を楽しんでいる。5月にダンスの授業を開始した同校では（1）苦手な動きを克服する個人練習（2）同じ動きを複数で合わせるチーム練習（3）発表の流れで計12時間の授業を組み立てている。「生徒自身が学びのスタイルをつくることが重要」と強調。見学した教諭は「指導となると構えてしまう。生徒自身が楽しみながら学んでいく授業手法は参考に」と話していた。（牧野将寛）

<http://www.fukuishimbun.co.jp/localnews/society/35184.html>

資料2. 「中学校ダンス必修化」に関するアンケート内容（一部、抜粋）

I ご自身のことについてお伺いします。

- 問2 教職経験年数
1. 1年未満
  2. 1～5年
  3. 6～10年
  4. 11～15年
  5. 16～20年
  6. 21年以上
- 問5 ダンス経験について、当てはまる番号すべてに○をつけて下さい。
1. 大学時「ダンス授業、履修半年以内
  2. 大学時「ダンス授業、履修1年以上
  3. お稽古と（経験年数： 年）
  4. 高校補習活動
  5. 大学補習活動
  6. その他（ ）
  7. 経験なし

II ご所属校の体育年間指導計画についてお伺いします。

問9 今年度実施（実施予定）のダンスの内容について、当てはまる番号すべてに○をつけて下さい。

- 問9-1 創作ダンス
1. 様々な課題で即興的に創作する
  2. 動きをアフォーメム（統調・統訳）する
  3. 自然現象や日常生活を題材に動きを捻じめる
  4. 群（集団）の動きを工夫する
  5. 椅子などの「もの」を使って表現する
- 問9-2 フォークダンス
1. いくつかの簡単なステップを習得する
  2. 地域の踊りを覚えて踊る
  3. 日本の伝統的な踊りを覚えて踊る
  4. やさしいソングを覚えて踊る
  5. 外国のフォークダンスを覚えて踊る（具体的な曲目： ）
- 問9-3 現代的なリズムのダンス
1. いくつかの簡単なステップを習得する
  2. ビデオ等による既成作品を模倣する
  3. 教師指導による既成作品を習得する
  4. 既成作品を応用して隊形変化などを工夫する
  5. 2人組等で相手と掛け合って踊る
  6. まとまりのあるフレーズを創作する
  7. ロックなどの音楽に合わせて自由に踊る
  8. ロックなどのリズムの特徴を捉えて踊る
  9. グループで簡単な作品を創作する
  10. 創った踊りを見せ合って交流する
  11. 体育祭等の競技として発表する
  12. その他（ ）
- 問10 昨年までの5年間、ダンスの指導をされましたか。
1. 毎年指導した
  2. 2年以上指導した
  3. 1年のみ指導した
  4. 指導していません
- 問11 問10で1、2、3のいずれかが回答された方にお伺いします。実施されたダンス種目について、当てはまる番号すべてに○をつけて下さい。
1. 創作ダンス
  2. フォークダンス
  3. 現代的なリズムのダンス
  4. その他のダンス（ ）

III ダンス及びダンス必修化についてのお考えをお聞かせ下さい。

- 問15 問14で「重視していない」と答えられた方は、その理由を1つ選んで下さい。
1. 自分に体力がない
  2. 他領域に比べ、面識がない
  3. 現代ダンス
  4. 他領域に比べ、面識がない
  5. 7. その他（ ）

2. 体がぶくりにならない
3. 女子がやるもの
4. 学校が否定的
5. 周りにやる人がいない

問16 「創作ダンス」の指導の際に障害になることは何ですか。順位別に3つ選んで、その番号を内に入力して下さい（以下、質問17、18も同様）。

1. 生徒の体力がない
2. 生徒の能力に差がある
3. 自分で創作が理解できない
4. 自分で動いてみせられない
5. 自分自身あまり好きでない
6. 助言の仕方がわからない
7. 評価の仕方がわからない
8. 指導内容がわからない
9. 指導過程がわからない
10. 施設・用具が不十分
11. 学校全体の取り組みが消極的
12. 適当な伴奏音楽がない
13. よい指導資料がない
14. 男女教員構成のアンバランス
15. その他（ ）

1位： 2位： 3位：

問17 「フォークダンス」の指導の際に障害になることは何ですか。

1. 生徒の体力がない
2. 生徒の能力に差がある
3. 自分で踊り方がわからない
4. 自分で動いてみせられない
5. 自分自身あまり好きでない
6. 助言の仕方がわからない
7. 評価の仕方がわからない
8. 指導内容がわからない
9. 指導過程がわからない
10. 施設・用具が不十分
11. 学校全体の取り組みが消極的
12. 適当な伴奏音楽がない
13. よい指導資料がない
14. 男女教員構成のアンバランス
15. その他（ ）

問18 「現代的なリズムのダンス」の指導の際に障害になることは何ですか。

1. 生徒の体力がない
2. 生徒の能力に差がある
3. 自分でリズムがとれない
4. 自分で動いてみせられない
5. 自分自身あまり好きでない
6. 助言の仕方がわからない
7. 評価の仕方がわからない
8. 指導内容がわからない
9. 指導過程がわからない
10. 施設・用具が不十分
11. 学校全体の取り組みが消極的
12. 適当な伴奏音楽がない
13. よい指導資料がない
14. 男女教員構成のアンバランス
15. その他（ ）

問19 ダンスは生徒にとって大切な領域だと思いますか。

1. そう思う
2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない
4. 思わない
5. わからない

問20 ダンスにはどのような価値があると思いますか。とくに重視するものを3つまで選んで、番号に○をつけて下さい。

1. 感情を豊かにする
2. 御勤感を養う
3. 身体を知識できる
4. 仲間との主観の時間をもてる
5. 美しいものへの関心が高まる
6. 競争活動でない
7. リズムによって体がぶくりにできる
8. 表現・伝達の喜びを体験できる
9. 日本や外国の文化・伝統の理解が深まる
10. 想像性・創造性豊かな人間を育てる
11. 心身の開放ができる
12. コミュニケーション力がつく
13. 一人一人の個性が活かされる
14. その他（ ）

問21 上記のとおりではない、しているが不十分という方はその理由を記入して下さい。

問22 ダンス指導をする上で、一番参考になるのは次のどれですか。

1. ビデオ等の映像資料
2. 優れた公開授業
3. 優れた実践報告資料
4. 講習会での実践
5. 講習会での講義
6. レッスン所の体験
7. 自主的研究会
8. 学習指導要領専門書
9. 実技の教科書・副読本
10. 「しんぶんし」などの典型教材
11. 指導に関する大学時代の履修経験
12. 身近にいる先輩同僚友人等の指導
13. その他（ ）

問25 必修化に対する御意見がありましたら、自由に御記入下さい。